

特集Ⅱ

映画『三度目の殺人』は枝裕和監督を斬る！

2004年『誰も知らない』で衝撃的な母子家庭の崩壊映画を撮り、世間をあつと言わせた枝裕和監督。その後も数々の話題作を発表し、今や日本映画の屋台骨を支える存在となっている。しかし、昨年発表した『三度目の殺人』に関しては、私たち「シネマ游人」の間で、珍しく賛否がはっきりと分かれた。ここにその両批評を取り上げ、この作品を改めてレビューしたい。映画のカタルシスのない、いわば是枝の不条理劇をあなたはどうかとらえたか、否定派かそれとも肯定派か？

2017年9月公開 東宝・ギャガ 124分

【監督・脚本】 是枝裕和

【出演】 弁護士・重盛 福山雅治、同・摂津 吉田鋼太郎、同・川島 満島真之介
被疑者・三隅 役所広司、被害者の娘・咲江 広瀬すず、同妻・美津江 斎藤由貴

【あらすじ】

殺人の前科がある三隅が、出所後働いていた食品会社をクビになる。その恨みから工場の社長を殺し、金を奪った罪で起訴される。三隅は犯行を自供し死刑がほぼ確定している。弁護を引き継いだ重盛は、何とか無期懲役にもついでこうと考えている。調査を進めるうちに様々な疑問が浮かび上がり、三隅の変幻自在の対応に、弁護士の重盛は翻弄される。金目当ての殺人のほすが、週刊

誌の取材では被害者の妻美津江に頼まれたと答え、調べていくとさらに三隅は被害者の娘咲江とたびたび会っていたことが、分かってくる……。

否定派

是枝の自信過剰作

藤田明 映画評論家

津の彼岸花映画祭、もし、有料だとしたら観客の数はどうなるだろう。名古屋までの交通費もあつて一本の映画が高くつく身には、ゼニを返せと言いたくなることもしばしば。一方で無料というのは別の感慨が伴うわけである。

チェコの『ハイドリヒを撃て』はゼニ返せだった。それなりに期待していたのだが、後半などドンパチが目立って監督者の心が全く感じられない。あとでイギリスの監督を呼んだと知り、英米系だとそうなるのか、と自らをなだめる。戦中の一大事を自国の監督で撮れる絶好の機だったのに。

是枝裕和『三度目の殺人』も大損した例。冒頭、役所広司のシーン、そこでこの作品はダメと直感が走る。ミスキャストそのもの。終わりまで役所は自分の役がつかめずじまいだったのではなか。いか。いや冒頭のそこからして映像も全体に冴えない。

作のモチーフとしては法曹界への疑義という一件がありそうだが、裁判長らの裏での会話に片鱗はうかがえるわけだが、それな

らそれでシナリオの組み立てを綿密にすべきであった。脚本・編集までワンマンでやってのけるところにオゴリすら感じる。協業という大事な一点が抜け落ちている。

接見場面が何度も出てくる。あんなゆるい形が実際にあるのか（権力者ならあるのかもしれないが）。ラスト近くの二重写しなど稚拙で見えていられない。リアリティを放棄し、幻想風作品を企てたのか、などと好意的に考え直してみたが、監督は自信もなのまま撮影に入った面多々に違いない。

被害者の女性に関しても肝要な一点を観客の想像にお任せ、という試みなのだろうか。是枝の諸作の中で、『空気人形』など、試みのうまいしさに好感を抱いたが、今回は自信過剰がすべてを台無しにしてしまった。

海外の映画祭へよくぞ出したものである。政治の劣化同様、この程度で日本の代表と張り切った関係者の感性の劣化も問題。日本映画も落ちに落ちたと海外でのささやきなど、なければ幸いである。



役所広司 VS 福山雅治

否定派

忌むべき性暴力の描写不足

伊藤英子

男女共同参画みえネット顧問

カンヌ国際映画祭で2004年『誰も知らない』で最年少の最優秀男優賞、2013年「そして父になる」で審査員賞を受賞した是枝監督の最新作とあって大いに期待した。

これまで、社会現象を切り取り問題提起してきた作品を撮ってきたこと、その課題と福山雅治がどう演じるのかと興味を持った。さてこの映画は、裁判ものである。勝利にこだわる弁護士・重盛は、同期の摂津から依頼された被疑者三隅を担当することになった。彼は、解雇された工場の社長を殺して火をつけたと言われ、これで三度目の殺人を犯したという。既に犯行を自供していた。このままだと死刑は免れない。無期懲役に持ち込もうと調査を開始する。

重盛には、別居中の妻と高校生の娘がいた。そして、被疑者三隅にも、30年会ってもいない娘がいたことがわかる。このことが事件の行く末に大きく影響することになる。総じてやはり殺人事件は重かった。

だが、接見室で、弁護士重盛と被疑者三隅の横顔が重なるシーンは、この映画のクライマックスとして、また二人の心情を表現してこれ以上ない効果があり、映像ならではと思わせるものが

あった。福山もよく演じ、それを受けて立つ役所広司もさすがと感心した。が一方で、どうしても、役所広司が殺人犯と思えない、殺人を犯す凶暴性は感じられないのに違和感があった。『わが母の記』（2012年）で、文豪井上靖を演じ、その風体その雰囲気を見事に演じ、役になり切ることでできる役者として感心していたのであったが。しかし、今回は、父親としての心情表現が、殺人者としての顔を消したとみるべきか。それぞれの娘への思惑が、弁護士と殺人の被疑者の思いが一致してしまったという、稀有な出来事が生じたからだろうか。

弁護に真実が必要ない。そう信じ勝利するための法廷戦術を駆使してきた弁護士が真実に向き合おうとして翻弄される。自分自身の娘故にだ。それこそが監督の意図するところ、我々への問いかけであろうか。殺人者と弁護士も人として同じなのか？あるいは、司法の在り方も問うている場面もある。だとすると、突っ込みが足りなくないだろうか。疑問が残る。

それだけに、殺人の動機となる最も忌むべき性暴力の描き方が足りないと思った。

2011年の映画『ドラゴン・タトゥーの女』監督デヴィット・フィンチャーをご覧になった方は思いだしてもらいたい。その映像は、半端でなかった。原作は、スウェーデン発のベストセラー『ミレニアム』。二人の女性がそれぞれに、性暴力の犠牲になる。

タトゥーの女の場合は強烈な表現だったが、彼女が調査する、行方不明の裕福な家庭の女性が遭遇する近親者による暴力の表現は、決して露わでないにもかかわらず、恐怖を伴って見るものをゾッとさせたのであった。

被害者であるが、その父親がわが娘を犯す、それを見て見ぬふりをする母親こそ、裁かれるべきである。真実を闇に葬ってはならない。弁護士も三隅も咲江を大衆にさらす事が忍べなくなり、真実を隠ぺいした。二重の罪を犯したことになる。これこそがジエンダーの犯した罪といえよう。被害者の娘咲江の言葉「ここではだれも本当のことを話さない」「だれを裁くのかは、だれが決めるんですか？」は、重盛にとつて一生の重みになるだろう。勝手に付度してはならないのである。



広瀬すず

肯定派

起承転結の結を観客に委ねた野心作

西松 優

日本映画研究者

是枝監督は『海よりもまだ深く』の次の映画に、舞台を司法界に移し裁判所・拘置所を舞台にした心理サスペンスドラマを選んだ。

映画は起承転結があるものだが、この映画は結の部分がはっきりしないので、評価は大きく二分すると思われる。監督が意図して結末の見方を観客に委ねているように見える。

ドライで法廷戦術優先の弁護士重盛が殺人を自供した三隅の弁護を引き受けるうちに、次第に「真実」を探すことに目覚め三隅というブラックホールに吸い寄せられながら真実にたどり着こうとするのが縦糸なら、司法界の怠慢を炙り出すのが横糸である。

殺された三隅の勤め先の社長が食品偽装に手を染め、元犯罪者を低賃金で働かせたり、娘咲江を長期間レイプしていたことや、社長の妻美津江が娘へのレイプや食品偽装を黙認していたことを重盛は知り更に真実に迫ろうとする。重盛が三隅にのめり込んでいく心理描写や重盛・三隅が拘置所で相対し攻める重盛と翻弄する三隅の両者の迫真の演技が素晴らしい。重盛が迫れば迫るほど三隅の実像は遠のいていく。悲劇の未亡人を演じた美津江がずるいリアリストの心の一端を覗かせたり、咲江が三隅を救おうと父親からレイプされていたことを裁判所で証言しようとする行動する心の動きも上手く表現している。

一方、三隅が公判途中で無実と供述を翻し、三隅の殺人の量刑から殺人の有無に焦点が移り、裁判長・検事・弁護士で協議するが、司法界の論理で三隅の無実の供述の真偽を追及することを放棄し、そのまま殺人ありきの量刑ベースで進めていく。「真実」

を追及する姿勢は微塵もなく、裁判を期限内に終わらせようと汲々とする裁判長と損得だけで判断する検事、抗しきれない弁護士等本来「真実」を求めるべき司法関係者の実態が明らかにされる。

この映画では本当の「真実」が明らかにされない。所詮真実なんてわからないので、観客なりの真実を見つけてほしいと監督は言っているようだ。映画を見た者の仮説で結論づけるしかない。



福山雅治

三隅の発する「理不尽」という言葉が響く。裁かれるべきは三隅か社長夫妻か司法界か？ 主要登場人物の心理描写と演技が素晴らしく、2017年屈指の日本映画だと感じた。

肯定派

司法システムに対する痛烈な批判

林 久登 スタッフ

是枝の挑戦は素晴らしい。2004年の『誰も知らない』で母子崩壊のドラマを撮り、私たちに衝撃を与え、『歩いてても歩いてても』で、長男を亡くした家族の日常を切り取った静謐な映画を作り、

2013年になると『そして父になる』で、子供の取り違え事件を取り上げている。つまり、家族がテーマになっているが、常に社会に目を向けている。

同じ家族ドラマの第一人者小津安二郎は、家族の日常生活の細部を丁寧に描き、普遍的な作品を作り上げた。が、そこには、野田高梧という協力者があった。でも是枝は違う。一人で脚本から演出、編集まで手掛けてきている。しかも、日常のなかに巧みに非日常を取り入れ、社会性や、その時代の空気を取り込んでいる。その挑戦する姿勢は素晴らしい。ある意味小津を超えていると思う。昨今の元気がない邦画界で一人気を吐いている。作家性の中に、エンターテイメントをうまく融合させる、数少ない監督だ。

今回はある殺人事件の裁判を巡って、司法の舞台裏にも切り込んだ意欲作だ。法廷と刑務所の接見室場面が中心のセリフ劇なので、娯楽性に欠ける。だから役者に力がなければとても持つドラマではない。その点、キャスティングが素晴らしい。被告役の役所広司と弁護士役の福山雅治のガチンコ対話、福山に加え吉田鋼太郎、満島真之介の、弁護士3人のチームワーク。それに被害者側の一癖ある母斎藤由貴、と障害を持つ娘広瀬すずの顔ぶれはピタシカンカンだ。

弁護士の重盛はその職業名の通り、被告を弁護する立場だから、

たとえウソとわかっていても、被告を救うためにはそれらしいシナリオを作らなければならない。それが弁護士役割と日ごろから割り切っている。彼自身裁判所は真実を追求する場ではないと思っっている。

しかし、三隅と接見しているうちに、彼のコロコロかわる供述に振り回され今までのビジネスライクな姿勢が揺らぎ、何が真実なのか知りたくなってくる。事実の一つでも、真実は100通りあると言われている。2人の接見時のやりとりは白眉だ。

テーマ音楽が素晴らしい。イタリア人の作曲と聞かす。この重い作品を観た後、エンディングに流れるこのピアノとチェロの音色を聴いて私はホッとした。そして、三隅の想定外のあの供述は、「俺に代わって生きていけ」と、言う咲江への最後のメッセージだったに違いないと確信した。

三隅にとつて、金目当ての殺人であつても、美津江に頼まれた行為であつても、咲江に同情した動機であつても、どう見られてもいい。実行犯は自分に間違いないのだから。そして、真実は本人だけがわかっていなければならないのだ。ただ、それによって、前科者の自分に誰にも相談できないことを、胸襟を開いて打ち明けてくれた少女をこれ以上苦しめたくない。それだけは何としても喰い止めたいその一心だった。つまり、是枝は三隅のような極悪非道の男でも、必ず人間としての一握りの愛は持っていることを示し

たかったのではないか。と同時に、今の司法の裁きに対する痛烈な批判を三隅に代弁させることも忘れてはいない。

最後の接見で重盛が「咲江のためにわざと否認したのか？」と聞くと、三隅は「それはいい話ですね。もし、それが本当なら」と穏やかに答える。まるで自分のような人間には縁遠い話のように。しかし、それは彼独特のポーズではないか。

終盤、裁判が終わって三隅が退廷するとき、傍聴席で咲江が呆然と立ち尽くしている。すれ違う三隅は顔を合わせようとしない。これでいい。是枝のダンディズムと読んだ。今年のトップに入る秀作だろう。

自宅にもどつて、パソコンのネットを開けると、「斎藤由貴、契約CMすべて降板」とあった。あの開業医との不倫が原因だそう。これで彼女はスキャンダル騒動として、3人目と言うことで「三度目の不倫」と揶揄されていた。役者は舞台やスクリーンで見せればいい。私生活は関係ないと思うが……それにしても3人の子供を持つ50歳の主婦、やるねー。



役所広司